大千世界樂屋探 初編 下

へ13
2835
上 3

へ13
2835
3

有情非情大千世界樂屋探初編 巻之下

江戸戯作者 式亭三馬戯編

却説孝婆敷を扑て曰〻私が奸曲院欲心貪着信女と
なて悍ゐぐる丈人と宗旨違てお寺もかぐござり
はと私を代〻院号丈人を釈妙譯しまて三夫おるも
かくよ集りはとのさそこでアお聴るとてやさいまし
草市の買物うふお佛器のお磨物うふ精美掛を
製るまでうちてがぐ居ゐ財をあらゝうるもつけさせど

2835
3

そんなうと買ふて皆私ひとりのお役さ。今年の若い者が
倚合て仕事をもるうとやうて十三日にそりと往て
偷足をして現さうが。嫁の尻へくんくと日がある。三家よ
なる兒をこうけ。おいけく時その朝寝ご。助郎どのを
寄ぢ。草市よ所が。馴程人業ごう。雑所義
ごの板葉ごのと盗ろ物を馬よ附ち往買ぬご。
おんと裡にの戸を対して井端へ打往て草物へ掛
ろいぶ。お盛物と抹香袋を十分濡ち

ちまうと。我ぐまよ羅紗を持ごう。相積を和ぐ。
うう嫁よ問ろう眼さ。仕又嫁どのがおうざりのくせよにを
達者で。他が三言いと十言で返答をかくるのさ。サア
それうう夫婦喧嘩の始り。お長家中がかんて先々ふを
盗のことごう。おもよ景見ぬなせと。漸こよ静りほうぶ。
口小言をいとく棚を防ぐて。チョッいめくまんこを見徳
の悪い精男を拾へざんとかくておくべ。コレ家よ何ごう
掛地を汚うけるぢゃ。拾へう。仮面へ。出せといくご。イヨ

ろうちゃうふ孫くよ。あの掛物の婆さんが行水の事ゐさら。
そのうち後ろをこそぶ孫くけいちぶーいよ掛物ゐ。てりうく。老人ハ
不断がそくくとうるせくそれど。さんみ付ある婆さんが孫と
まごつきごなんのうのといひみと。ホニ〳〵二人ぶつ惡きく
とらふりのぶたまく盆よよぶれて経羅を燃して呼りゆうと
のさぶそこーぶ目のまい中をよろれと。羽芝が日見を孫ぶつぶ
はくちゃふあるあくと云てきりはゆーぶ。案の定その通り。まま
ぶーふ芋蕓和も温索麺も生まふぶこて。園子も粉を

拵くぐ面倒ぶ云く。アノそれ精灵さゐのお迎園子。お迎ひ
園子と言てあるくのを買て伽るシ。○精灵さゐの蓮飯
く。ひ純まみも上なきい精。雲さ法の蓮飯と呼あるくを
ありがさうに買くく伽ましと私どもい歯ゐるる。園子も
蓮飯も食ねうゐ。せあて和みお飯で芋蕓和の柔ゐ
所。温索麺でもたべようと思ひの外。脾手よされて飯り
はそそぶ。ホニ〳〵まそそふりう。国ぶくぶくといさーさまと

❶ 精も甘もかこうとする精灵と云て戒名も
大通院誘夏本晩居士と名のり一坐をおどろかす
伝。はるさゐの伝の

通り。魂魄の幽遠を世界の為に説き書物もないぞ
ごぞうらん。盂蘭盆の献供我とらふひくぶる本もあり。又か
漢文で書きのいさはぐくめれど。えて用ひぬ。ちくふねど
改ぬ。兼略なる為方も是非よもぐぎ。面くゝ子孫
繁昌を祈らぬ者もなく。子のない者へ他人の子を貰うて
家督とするも。畢竟は先祖の祭を絶さまんとの心ぐら
あるまいか。よゝ子。孫なる者をきんと。日本の
神道で祭るとも。或は唐山の儒法の通りも斎戒しく

まつるとも。又は天竺の仏法の様まゝて祭るとも。ひとと後の
おとむく西をりつてみあらぶ。いろうもなん孝子順孫
さうせぬ人ならぶ世間は二季の彼岸や盆の節まで。
人あるこある牙なりとも我をもかけて勝ひとも。厚く
敬ふべき舌でごぞうはとも。ちうれも嵩世を四角る
文字を読む人ども。何の彼のと高上な利屈ぞりいて。
昊穹を祈る者ぞもーア笑ひたまゝ世間は結昊穹を
傍へても。女童や家頼やうせの投金散宝さらぶ儒法ぐ

祥月よりあるうと思へば一日の齋戒もせずと我才の栄曜をと
百金を費さんがためにいざりまとぶらんと坐る裏家より
居て九人二百の棟割などよ行ふ者の親や祖父の忌日ぢや
とて油揚一枝買て供へ備へるなどは真実の祝玉ハテ
先祖の精霊もうれしく思ふてどうもせう只発心角まんせ
ウトの浮虚信者でさへ魂どもおく料理が不出来
でもおろそかに受るものでござりはせぬ他今七五三の高
盛をそなへられずとて真実うふまを向てられ移ぢ店棚ハ

勝手である貴物同様でどんな快く精霊でも受さうしやる
ぬ又家業作られさるを精霊の献立とて定りはなれば
本のこと必ず何よりはさうる料理をしてくるるば
はうとの孝岳その上どうぞ式方ハが邂逅の逗留故なんば
二季の物菓ごとてどうも工面の為ようで七夕菓子
とまして盆まつり一件よりてそうふひさいものぞ折角
まてても債うとの宣嘩を受てさそくつふんありさま
折ふけ焼餅の火と一緒よ消てもちんさい ハテサこれとくも

平日をよく心がけて一日もあざふ差さぞ酒は酔ふまうせく
先々ふ生人をわつきあるき夜泊りの翌日と宿酔の頭痛
抹額朝痛をさまうり牛睡をさまうり食物好き小雀ひ酒を
減ゝうり三盃の友を呼集めてどんぴく進行べぞ忽ち
身上を不都合なりはとナようるそとの正をあそと
性で家道をよく絶めさんとれが盃ふも仏静き勤りまと
うゝりくと身を拵崩をと家がなくゝ形るうふ精霊も遠く
寄て和尚ゝ十四日に成ふれもせど檀那寺へ行と正が

時ゝの音信がなんふ身をぶらゝい居候様で冷い
目脂を食ゝとゝと成ふを精霊仲間の恥ゝきから
業さゝびしから三ヶどのようであらうとふ世おもひが是非
子孫よかゝさうるりのそれは又墓詣さえせね単も多
れば差角死ぬのを損とえまとそべて魂ふなどゝ
甚日ゝびしの怪い身ゝの者が志り厚く生い実よするあさま
書物でもえさ人が俗説ゝの方便ゝのと簡略ふ志たゝれ
たとえば朝夕のお食をゝべて多をいゝくゝ人ゝの正ゝと紙

俗ごとの愚ごとのいとれさうで、傍うふ足苦しいやうなれど
其人を必ず律儀ふ、分をよく納るのでござりはと、が何
やう流の諸禮自慢ふ、飯を食ふも茶を飲むも、張躊を
して人品を作るとて、分を持崩して流浪して何の役ふも
立たず、万能ふ達て一心ゞ見ねゆえ、愚ごの俗ごのと謗る人の
所ふ食客となるゞ間めるとき、何ひとつもよね分でも面白
律義ふ、先祖の名ゞ耳ゆるとおりて也地走やとゞ先祖への
義理、大抵上ゝ世ゝ類和切の人とゆのでうるござりゃせう。

惡口を言ゝあざつらふ行過者い先祖の恩ちゝごの惡掘
とおりふゞ（金涙）●実ゝ我儘でござる。ゝ此精灵の詞代
用ひてあるゞ仏なふゞ。たとひ盂蘭盆経をゝんどとゆゞ。
仏の座ゝゝ親兄弟先祖の灵がござんことおとひつあて
一口の物も自分使ゝゝぶ満足。又裏店や九ゝ店の多狹な
家ゝ別ゝ掃を汚ゝふも及ばねこと。物入りお無ふあつて火の
用心もつるし。金仏の形が佛経ゝも神儒の作法ふも
かなてとゞる。持佛堂でも堪忍ゝる程ごゝ金家い無益の

物入るゝよ心の誠が肝心なるべし拵らえ鈍さをかんとおのれ。
其人の妻であるものを手向るが近道▲さうもあるべく女郎
買が好ごとて女郎を手向るあるもあるべし■鬼六 鯨舎がとてぐ
云く。棚経は三絵を淳ものもあるべく極くとさ■金波 そもそも間髪
さはもきんいも嬢ひ。侠者の精美く惡態を使るいらねば
りの。そこへうひよありさうな物さ■本醉 まづ詮どる所を
邂逅の客ごとやつてこんるあ者暗ん間くゝ近寄さねやるあ
ものさ▼姑 別して差人を目ざるんくゝまとふとやり

本醉 ◑むへしの盆だりでへるい年中さびくまるのごと
ある 古人精灵迎のひとん詰さ。所をも大世日限りあ霊ちんくゝぶ
あるさぶ■鬼 発角債主をて縁が深ん子■金波 その証拠を
歴くの書物あも紀してあるものと又古あるもの 孫
ぶあるさうだが。足を博誠よ他てこるさん▼その極月の
寒天さ人まさるものが。七月の日の新れ付よ来てやるん。世方
の海山幸見といあをものぶあ。債主よ茶を呂るやうあ佛頂
面をして立とぶうんて図子代使くるやら◑本醉 あまりさん

十六角豆と茄子の胡麻和を製うのぐら。嫁と姑のいがみ合ひ■卷六索麺のゆでかぐんうふまゝ婦喧嘩の火せり合ひけんまんてわくくふ送り火も焚ね不あーらひ。イヤハヤこゝもあも実平誤の利屋。京摂の字せんぼぢやァ稲くが女房の乱氣でぼちらんく。妻乱トハ

○佛の口器で細椀トハかるのうねとらふ細○東山の送火で大字大切

ゆせいるどさはぐの謎詞をひろけるのあり見ハむ

ちりひまり。洒落なり○一ふ字せんぐ○字さんちよトいふ

りのわり。近所のりぺら屋行をゝたとゝぐ阿房を絡て「あほ」トよぶ赤掘の名れ方言のり仍て「十のーまト唱」「あほ」のセンボとも「あほの二字を一畫ぐとるゝてえれば十のーまとゝるゝ〈ゝるふ十のまめどらふて。ゝらい阿房やと罵る隠語となれり「十の一」の「三と」で「〇口」ぢやトいふおきせんと「いふぢと「十の一」を「お字」「三と」を「きゝ字」「〇口」ハ浅の形なり。浅をせんと訓む紛ちおきせんなり。おきせんとを我が情人とゝていふとも。或ハ「十口」の「十」の「三」の「め結び」で

三さぢやトいふ古狸のことなり十口を古字ナの
二ごと「たゝ字め結び」めゝ字をもまとめ「ぬゝ字ゝ」三さを
きゝ字これをかるもの「古たぬき」といふべき字せんぼうの
為金二枚と歩のうらへ「カヽカヽ」ふかの字なり「茶碗屋の
地震」きて「八朝」せうぢやあるまいかと▲いふ公を「さとと爺
かゝゝ噂ゝ打割ゝ頼もぢやあるまいらん八朝をたのもト
いふ心なり此さぢ八書まとありてあるまいとゝあるべし
委ゝゝゝ風流誓古三味線大坂人の物語る條下ま

記ゝ近日国版を俟ゝ讀まべし

本眸

イヤモウはまゝふ極ゝ平ぢやァなきゝ。そもぞうゝ怪我あも
先人の妻魂をなりゝかるゝ孫が極ゝ全体落ちゝ発ゝ
ことゝぶ金後落ちゝも驚ゝも驚ゝいふ拵をぶゝゝね 鬼六ゝ
情の本家ハ幇間の身分。チト耳ゝ痛やの玉霰ゝ見も
分ゝ世過ぶゝゝ罪ゝもなゝふねとゝて箱根や立山ゝ
幇間の地獄もなゝ。虚を衝ゝゝ舌を接れと例もきゝ。
拯ゝ往生ゝぶひなゝの精灵ゝ為てゝ婆ゝ婆の

罪障を消滅のためあさん方はお話しゃきう。先為信を
驚かして面白可笑動るゆうる物の足もとれとぐ心痛の
煙管世帯の脂ぐんちりばまりの借金て一首ハ如ぐど
搗なくもお客をめぐけて切ゐけるぐ猪貪の肝門それも世間
並ぢやア往極くうもおるごろを表ゆて内心ハ夜又のゆーき。
仏でも欲事の極面をしてあらうをめんまり欲ぢ極くら
氣泉ぐ母とろ。ちどつけ極くう母奴ごとろ。ちっぷりお客ハ
呑込れて細く長くゆやなーてどどぐ金とりるぐ帯間

地獄の為信ハ多分お客も為信ぐ丁ど三馬ぐ狂言の通り。
けいせんは実なーとハ色いろ虚いろ客や云初あろん。
トもいろいろ口ーどもの味方ざテ。今時のお客ハ引ぢも遠も
なくく極くう大恩ゑ螺蛸を吹て金で食傷をとるゆうなぼを
利ても。内証をちんうぶうんで鱈之通を治くとゆう質之通
ぐ煙びてある中ス。上下ぶの入髪ごのト。一寸出るゆも捨利
の通ぐ衣裳付を大至風ダガ仕奴食ぢ極く代物ごテ。
生作の二三枚も引連て。どうぐ鬼六ハ内。トいうと茲大石の

祢めくふぶ・亭主を居ねう・但を猪う・亭主くと七ごん目の悪
洒落で門にうふ写込むト・氏方を店賃の二月分と売を
の才そえで・黙年半もうくも祢く不を附元氣で花ひ半
ゑごふ・どのう抵ぢやどゑ様ヨウ汶喬さ侯一別以来サアく
ぎんとちちふく・勢られませうドこくうぎ恩唄の出
褐が彈流と狼狽てう辺の合方が口カかなり今と大方今百年へらう
ゆるごらうと今朝の鳥影でも鳴くふぐ・モシ・付合の世界
うあれ限う子・虚ぢ内う・チトうさんぶ渡を走るぶ寝ま移れう子・

そりやァ不仮ぶ・ナイトモシ・道芝の露の口情ありゆなぶ徒く
お宝うせ人・年陸文角のありゆるぶで乎ぶれちやァ素ぷい
て子・ヤ時ふ寒ふ冷なれやゆもめふぶと・大分冷まと子・うと泥童
火陣の侍へお倚うせ人・ヤ風流子・東ゑ淋大哥・おうふびお供
ざの・コウ何ヤお昇や・丁どお茶が生ゑまさらう・甚新渡の猪ほぐ
上ヤさんせ人ト・虚八百のおべうとをうふぐて・大ぢを薩ぶせて
ねると女房とう者が同く一方の大将で・彼所謂蘭の風と
いふ美人茶ふ・紅梅亟仕入の口取をちよいと半ゑと・ちのちて

菓子尊皆の坐頭ゆてめつさゆあさふさこゝに食後菓子を
已が物の減後へとぐらふ擇ゆ撰て銭目ゆあつたり食ゆを
大そこだうう祢めふも惡にを云作食倒を。その度くゝゆ
徇どのきく。到頭衣を著せと茶たりう菓子尊を旨ゆ
隠遁して世を憂と記ゝて居るのゝナント。あまり情ゆ通ゝ
後へとぐらう。又他ゆもお客のあるりんゝ。菓子を惜いとぞふ
幇間と菓子を欲いとおりふお客とこゝ敦ゝ罪人ゝ。まうふ
八股の大蛇を煙壺ゆ飼ゝ。ゆうる大言ゝ。コウあとこの中

屋を家壁廣げて拙迂をたゝぷりこらう。向島の鞠場
和尚ゝ所うふ梅樹を四五種と。秋の七草を一種ゝ分て賞ふ
苦ゆ。あれを足ゆ踏らう。称布川や黒ゝくゝを根岸の
寮にドント飾りてゆる。竹ゝ欲くゝ墨濱の正福寺うふ丙を
してやらう。和尚大知已ゝテ。実の天井板ゝ入るゝ竹路子
の所うふ到来の埋木ゆ捻て如鰤木の長板を。三寸幅ゆて
交張ゝ雅ゝらう。まゝ足ゆゝ。あれゝ進上とちゝまうス。トキニ
お爺さん。先頃約束の榊も小写ゆ面の甲八ゝ丙令ゝ上

相意の板がのり有さうふ。もあんの口注文通りゆ拵せる。つりぶぶ。首尾よく乗れがあ屋。ホンニ此中の荒ぶつへの市松形へ
あつさ。どうでモン著てくんなせへ。著られ紙へぢやア恨ぶ。ト
天恩をうくるる中ゆ空法もうふ紙へうふ近所の金屏風の
料理茶屋へ小意幸まる物を一寸渡て。グルトちづりゆ鈔蔓て
スドンとしてえせる。揺丸う何うでざつと百文ずつの心痛。
ハテ幇間とりくども稼する品ゆへ。まられど。けぶけう大酒で

おあふうけるのスゆ大将大酒となつてらよく乗牛てうると。
あれもやらう是も生らうの安請合さうゆ鞠場の梅樹
秋の七草一面お咲るもゆメうど。根岸の稲荷川石ゆ。ぐまえ
浪よりゆ。正福寺の行音信不通で竹路ゆの埋木。
これへ一生埋木とうえて彩も形もえせど。如鱗の岩板
大きみゆ。ゆ。甲の掛蔓ゆも存ぜど。凡て考ふね新
の反魂。尋常のおつき合ごうふ。只「ゆきれッツ」「果る
ぞうぶ」ありス。代物前ふさくぐも五枚金五両をりふ。ゆ

と思ひの外一度二分々々漸く二度でご苦うて来まされるふ。
幇間自切が切れて飲食の中身こそぷり。ナントトアどうぐ
ごぜえませう。「客そど虚をつくね野幇間ス。洒落るもどの
分ぶでおぞぶ虚をつくるゆるふ。客生きとる幇間を虚も
つく程が分ぶたくね。ナントト客情なことぢゃおぜえまのせんろ。
金決 いろこは夫ハ現世の客情。未来をもれねで持こおぢゃぶ。
死でもどめて情こハ世の中の客情。あのまづ葬れの借ふ
立ッ人を。何と知る遠をもこ。婚礼の待女郎ところれふ

お寺へ往て待てゐるハどういふ量見でごぜらう。あいら
が脱くこと誤りまつこのごテ彼老人ゐどハ足弱ゐ。
ついその歩行を息ぎれして疲労。そこでお寺人先立て
往ぶゆるくこと随ふ歩行れる。まを血氣盛の壮士ど同じ
ゆうふ寺へ往て。叭をして待居ゐハ大きる癡呆的。葬送
とも野送ともいひやとうふ。往路を送ぶき者るりのぶ。
寺へ往て待受ちゃア。亡者に送てゐる物ぶ婚礼
待女郎ゐるくふ葬礼ス往路郎も好らうス。新頭の

天蓋で香炉や位牌を持せて壁くの葬礼が途中へ僅
二三十人とんざ淋しい葬式ごといいれるが寺へ行くと入れる
待受が五六百人ナント凝呆と詰ぢ石ア紙人の▼立入ること
だが強飯の分量が遠つかそれかあるき手工おすくさん途中へ
指捻同様の人数ごろ〳〵三百人茶も飛ぶ〳〵非人まで
余り遠らうと出くの外おまぜそれば五百人〳〵鬼六そこで
盛方が手轉りのさ先へ待居る所へそどろりと盛さ
ちが俄に半減となつてまぐんと汁ぶりかけは枝者も

一脇つけとちんぐ一本ばけと変る片木を五百人あのとと紙人
五十枚買て来く〳〵ぞろと先の方〳〵空て分を借集めく
二十枚目をお目かけるシ・それで呂紙へ付へ紙へ盛て仕を
引捨かとるシ・講中を一構別まして切溜へ煮豆腐の山盛り
五郎八茶碗の引盃を右向の板み路〳〵へ向て湯桶へ入て
銅酒すり土瓶へ入れる射へ茶と万遠ねゆうに土瓶の蔓へ紙を
結び付〳〵しのが世話功を経て狂言の山さ▲流行まづそと
まぐでへよりそもいさ竹皮へ漬飯を包んで結月へ板揚枝を

挟んで出すなどは。礼式を省いた新法でござる。且ひとつさ罪
の重いのは煎餅を十二文ばかり一袋にして夫を一人前
づゝくばるのが有るが。是の志れ縁安堵ぢやア無い人か。その煎餅を
土産にもするならば。是また穿損でござらう 鬼六 餅を出せば。まん
縁者の施主なみならさ人までが。二度取をさせるから。他人を
棄ちらかす筈の道理さ。尤も本堂で餅を撒けらる
するも志れ縁く 金兵 それも志れねでござる。むかしは施主が
家別に出して御礼に出行く物でござるが。近年は寺まで

に上らせてはくださるであり。イヤハヤ手綻などいたしまする
すべき ▲ 流行おやぢ 大勢さまが先に立て御免お宿へ上りますとのぐ
ござりますが略義ながら施主の御礼を申あげますと是非の
所を御苦労さま共にござりますと御挨拶おちなさる足
まして上下をきるやうにて。袴を脱ぎ衣の袂へ納れやら
早く先にたて帰る。お寺へ先へ往てござる連中は袴をたゝむと
膝の上へ畳んで両手で膝へぐっと押出して出語
風をしてゐるやつが。座に三折まして隣の小座の風呂敷へ

包ませるなど。五歩も送るね人情 ◐ 本聚 葬場より二歩行も
名の書てあるハ。跳初穂で供よまね人さ ■ 鬼六 あらふぶ不人
情の肇つぐ。寺ハ寺の方角ごろふのとハ本の
沼まで待るまで。コレ。葬よ往るもあれば行も行垂て居れとハ
施主を真向ゐ。て佛を傍向ゐ。と奴等さ ▼ あれとハ人ぶ
葬送の出るハ後まで。セイく云ふ寺へ矢つけと所ぶ。
人子を一人もなし。玄冥人施主を呼出。て。礼を述る。
人ゐどハ真寔の上なしでございませうよ。孟工 もはゆくさん

▲ 流行 大汗よなりんて葬礼を返るもつくの役よ ◐ 金沢 さう
くとおり人ぶ悲人ゐるや居。坐席にも皆ざゐおのれぶ往
たの所へかけ生を者もござる ■ 鬼六 こんちらもその組ごんと。
亡者となんて非がつろ中。シ多が燒香さとぎゐ返れとこ
潜折を對屈。行くぶ大出ずぶテ ▲ 流行 今ぶやアこ遠で半ゐ
施主ぶ礼をもるゐ。ゐ。ぶ。行も中ぶ ■ 鬼六 後ゆ
連ゐを寺へ帰迎ぶ。歩よハイさゐうゐくス ◐ 本聚 向三形ゐ隣の
人まぶ先へ寺へ往へゐ。不實とゐ何ともいろう

ゆうがのぶ。ゆえんどうぐ止さふりのぎ●ずをとれば施うも家
別よ返れとるゆうゆるりはと死でゆく身よ銭へいふねと
いの志人数の多少道中の雨も雨もかまうもど跡よ残る妻子
眷属と俗よ交らてゆるゆえ世間のほうきぐるぐやま
ぢやぐ是もうおあぐよふる分の花美を捨ゆびてるぐぎる。
おのく者を悟と質素をぶけるぐ専一の法るゆ。我ぐ他の
葬送とる射律儀ゆ輿ふ添て往けが。他も我が葬送の射
輿よ添て供く見ゆと已ぐ為情なれが他も又為情よする。

自精霊を兼未にしる。其報忽ちまりて兼未ゆ
一切精霊世の中ふ他のワきぐゆふぐこそ。他のうるゆふ我が
ワきなれトむうかふいふぐく各も我ゆも再び涅槃ふ
生を得ようぶ。ゆをきりくて動ゆせう。サアくこれうふ鞍色
を解ゆて。圏彩と白紙を擇分られと跡を有縁世ゆ孫の
別れく。鞍ゆ二十六夜ゆる渚所の敷筵と生ゆ変く有為
轉変の世のりゆ皮精霊も舟中ぐ圏彩の威勢ゆ
うく及がね。南無阿弥陀佛。南無妙法蓮華経

器財之部 きざいのぶ

第三

蚩尾と試風の鳥形との夕涼

鬼ゝ ●つゝ暑いぞ〳〵。ふか暑い日であつて。屋上石灰の焼る汗洞をゆゞむ。天窓の青苔ぐろうが頼ぐされど。山炎天ふ蒸されてこれも拍子ぬけらうス庇間の地面をようやど安尾と生ゝとゝえて。へん〳〵草や性根草が小江ふふ生ゝぶ。猫の獲物の乾ゝうをまうと一緒よ。ぷん〳〵と鼻へ這入る。とんぐ正で草いきれを鼠物ぐせ。まゞ

白ぐさる。ゆゝぐ。フシ〳〵。トかぎ〳〵ア鳶めがいつの写ふゝ鰻の骨をさゝつて引て棟尾の絹へ張〳〵。すうゝ。せんかゞ。

おれが小賢へ糞を垂つけて白ゝく痕をはけゝつけゞ。昨日の白酒でやう〳〵落ると。又猫めゞ二度目をもあふゝけゞ。足まもおそれるスト。いとゞ歳の火のえんぐふゞ〳〵どうぐ動えゝけゝも。まゝつてある鳳凰のかゝふもむも。暑ゝうさぜ。▲暑いのいの。かゝつきー目が出る。ゆゝぐ。おゝくも。

焼切さらう。●ちゝんとしゝこ。雨ぢゆゝぢゆゝと吸込のよ。俳一降ゝーいの。▲ざゝと行ゝ。一年中ゝるゝくとゝ。

だうりのるも氣がきろ往ぐせ。風ぐ風てちらと休ちろとろのと
下ろろ調市が上りて来て。むまこふ色ちやアが。別ちやア往ぐ
風車の名代秋造よ。今度来ると小二めハ目紛しい程いろづら
ぐせ。火の見の笠木へ登りてあれが天窓くつまろて居ろうけが。
鼻と尾を折ぐ。チョッ生れもつろね支離よるやアがのざいあ
まハ。全体おらが嫌ぐ。寝の内の居ゆの細工で生まるのぐ
ろ。寝う後寝の為人もなし。今ぐやア居ゆハ居ぐ。癒治の
教師が往ぐ。とんぐ災難がのるりんぐの。ろうーゆ所の小二も
悪いこぐろをとろよ。今ぐでろそ番頭なれ。おらが店の丈ハ
長が森小便をこれぐ時分。ぐてきるいろぐぐ者よ。棟尾
の上を走廻りてハあれが天窓くちぐこつのぐ。光明丹でもぐが
面を彩ぐり。お坊さんの額くはけぐ。今宿の余りをおりて来て。
あれが眼を泥箔ぐ。社慰ぐ物ふるくんけが速いあぐ
ろの間ろ番頭ぐ。ふるて。丈きる面をしてある。その
面の大きぐ。あれいろでも蚩尾ぐ。ろうー
人を下見ふて大きる面で睨付ぐ。所ぐ。

見▲おれも高く泊りて居るが。南世界へもう行く。都角樓を低くして下から這ひ行くぢやア南府紙ふ行くよ。ダガおれ人たちの年寄ぢやアそりやア生まれ人●どうして生まれるりんろ。業忍瑳伽の過去が出ずるが仏ト。生れてくるエどう百年目ぐ。夫を免れるうもあれも家う差年よ。今府の新屋をなぐアきんでも。考さもあれるかるのう世行く▲生まれさむろしりの人生質が丈夫向ぐものを。銭が七貫ふれば小判二両ゴなんさ時と。今一両ゴなる府とん屋ゴうぐ。すぐでの

物が遠ふ行さ●おらが若い時ハ門辺ゴ鬼屋を垂さをん
ぐつけが。今ぢやア鬼屋の名だろうで。鬼をつけ行くそれぐうふ
今の人氣ゴも合ぐ。おれも漸くゴ考老だろう。ナニサ。骸きん
丈夫ゴふ。若い時屋をゴどゴ負るゴちやア行く。付町内の屋上
中ぐ。万八の土蔵と。伊勢小次の店蔵ど。おれぐうが古ん
りのよ。箱棟とろ高く立流ゴうけるのと。抹額通り紙
家屋ゴもして立て間をかけるのハ。生家の物物でおらが
若い時ふに絶て行くことぐ。コレゴんなせん。爰の屋上も

郭は二尺八地尾の新で歪形さう雨をおさくと深迫をこ人
往ちやァ悼みがふ老耄でもむうーの地尾ぐ雨をぐいくと
そぐいで さァりとぶん流ーくこえせれ今の新尾のやうふ
甲乗の寛るみちやァ稲へ火よ弱い下り尾ふ天上えるる稲る
地尾ちやァ江戸尾の面様ーといふのぐ棟も平も指形ふ
るさぐ家で昔尾の根性骨ふえせる所さ仏板よ踏
あるいてもこうりともいふのぢやァござふ稲へ本のるやさぐ
へ二つぐも稲へ ちうー地震を身の毒ぐ香ー ふ手で

蔦るぶ家那まで限ふ俱ーふ中氣ぐ▲風呂隨ふ用心さるぐ
い。おあへ又美女をこえて条の仙人を生ふ平ぐぜ●鬼女湯
のふ改ぐで若ふ附うふ悟うさりのよ▲風呂もうちァ浮屋の
風呂鳥でぶうくーと手さへドス時ぐの風ふ順居アやァ
いさもくさも稲へといふ丈。ドリやこれうふ往来の美女ふ
ふえて楽まうう。真貫ふを日傘でかくれるぐ完そうく
蔦ふて手ーと下をそっやまるぐ。指物ぐよんぷぐ
ふるふェざうと五六十両の天窓ぐあの天窓を潰ること。

ちよいとしこ土産ぐ生まるに。あの亭主も不経済家ぐぞ。
ヘン。お三どのも同ぐく指さ。ア馬爪を止ぐい。指ねよ劣ぐのよ
不便ぐぞ。●鬼世の中を後ろうこそ。ちつぷぐ面白
といふ名れど。上ろふ座下もまんざらぐ極くスドリヤ夕涼と
出ろけようろ。ハテ。そろく夕風が生て来さ。アいく風ぐ▲風
かくをぐると思って
くぶりとふりながら サアく おれいこれうふが開ぐ。アいく又
吹て来さトぐると●鬼アし彼所く趨往く人を銭を四百落し
まろく
ぐぜ▲風ドいく。トくろと風ぐ丹眼ぐのろ。よくあまぐ

うえろぐぜ。ア。ア。折助ちぐふ拾ひ●鬼ハテ運の好折ぐ。ハツ。
そろくまよ。ハツ。そりくまよ。ホイく風でもうさろ。ちぐふ噴鼻が
出る▲風噴鼻の出る傍よおれい故障ぐの●鬼虚い極く。ハツ。ハツ。
て出さうで出極ぐハアり。そりくまよ。○フム。道理こそ鼻孔へ
蝙蝠が飛込んぐ。

○くさめよりて思ひ出せしの
避暑とふことをよりし戯咲歌

夏をよろこぶ愛されば
暑と吹て雑もたれひれ

三馬

筆耕 石原知道

式亭三馬著述讀本數種雙鶴堂發市書目

流轉數回阿古義物語 前編五冊既出 あこぎ浦おひく網のたびきなれば ながふねて平次が支跡をたづね さまあり絵き絵入よみかた
一名大岳十人ぎり 後編五冊嗣出

三蓋 客者評判記 初編三冊既出 殘編三冊近刻 役者評判記の引かへふ見物の いろくさまぐさを役者にたとへて評し たるまことき思入よろこ本なり

忠臣藏偏癡氣論 全一冊既出 忠臣ぞうの人物伝善悪邪正 さまざまにをのゝ利屋ぞ論を まうけ絵入よろこなり

癖所謂癖物語 四十八癖 初編二編既出 世の中にあるとあらゆる癖くせの 癖をとらふくせを細くまうがちて 其くのありさまを見あつるるろ ごとくまうるる思入さろうなり
三編當春出来

田舍之居忠臣藏 初編 二編 未 田舍寺の本堂をあて村のりひ 行者のてのあ臣義がくやも 寺屋もまのあるうしろなるまうなる本こ

雙鶴堂藏版書目 江戸田所町 鶴屋金助梓

五山堂詩話 全一卷 池無絃先生著 奇ヒ妙ヒナル詩ノ話ヲアツメタレバ詩作ノカトナルベキ面白キ書ナリ
全二編 三編 四編 五編 六編 既出

詩聖堂詩話 全一卷 天民先生著 珍ラシキ詩ノハナシ並ニ自作ノ絶句百首ヲ輯メテ初心詩作ノ便トス
全 百絶 全一卷 合刻

醉別帖 廣澤先生書 全一卷

尺牘帖 東江先生書 全一卷

早見道中記 懐中本 全一冊

小學句讀 道春點大字 全四冊 世ニアル小學ハコヽカリ謬誤ヲ討シ大字ノ善本ナリ江戸版ト御尋給ハヾ

伊勢物語 ひらがな大字 全二冊

草書法要 全二本 漢魏六朝ヨリ唐宋元明ニテ諸名家ノ草体ヲ諸法帖ヨリ摹勒シテ書引ニ類聚スタイヘバ其ノ字ヲ捜ントスル時毎卷首ノ撥字ヲ見レバ其ノ卷其ノ葉ナルヲ早ク知ル其巧ニ至リイロ〳〵ノ字体備ハレバ其好ミ所ニ從フベシ凡草体ヲ求ル速ナルヲ此書ニ勝ルモノ無シ因テ早引草字彙ト名ク

一名草字彙 別号 早引草字彙

東都劉十子著

増補暦略註 全一冊

十返舍主人撰

諸國書狀差 懐用小本 全一冊

字彙 集成 **増補節用早指南大全** 横切大冊 全壹冊

滑稽江之嶋土產 十返舍一九編 初編二編三編合五冊

圃老巷說 **蒐道園** 東揚庵北編 全五冊

忠臣藏偏凝氣論 式亭三馬作 全一冊 歌川國直画

流轉 **俗古義物語前編** 五冊 式亭三馬編 歌川国貞画

公子行 廣澤先生筆 全一卷

蘭亭序 同 筆 全一卷

寛齋百絶 全一冊

詩聖堂詩集 窪天民先生著 全三冊

獲山庭訓往來 全二冊

御家 **文章自在** 月齋筆 全一冊

仲花略画式 蕙齋筆 全一冊

略画早指南 初編 全一冊

同 **獨學** 二編 全一冊

同 **獨習古** 三編 全一冊

江戸大繪圖八枚縅 一枚

御家流 **當用諸文章** 横切本 全一冊

俳諧寂栞 春秋庵白雄著 全三冊 拙堂老人増補

俳諧の規矩考 紙を切る 附合口絵 種々の格式目録 流行の句体と等級 仕方ふあそぶ人坐右ふせんがあるべし

文章達筆 長雄東雲筆 全冊 新刀角力鉛畫 一枚摺

長雄女今川 百瀬耕元筆 全一冊

百瀬隅田川 同人筆 全一冊

長雄新消息往来 宮澤東山筆 全一冊

長雄新年中用文章 佐藤對雲筆 全一冊

百瀬東風帖 野村耕舊筆 全一冊

長雄増補 婚姻女國畫 岩岡耕淵筆 全一冊

長雄点附 庭訓往来 耕陶助穩筆 全二冊

袖玉両面 年代記 大奉書摺 永禄七年戊子 一枚 疱瘡請合 輕口噺 十遍舍一九作 全一冊

狂言田舍操 初編既出 俗多り太まさこせんのがくやとさぶせ一田舍あやつたり義太夫好の男方みたりうみ復とぞのようなる本心

大千世界樂屋探 二編 初編このせてる目源のうちうりあるうちのうちみうる紙先とーく来年著述の上用板仕ゆ上

人間萬事雲誕計 二編 来年出来 初編ホひとーく世の中にあるゆうとーいふことをいつあてとーく寄ちる本

文化十四年丁丑春正月開市

書物並錦繪 江戸田所町新道

地本問屋 雙鶴堂 鶴屋金助上梓